政権交代.com　パンフレット

2020年9月作成

内容

◎選択肢を捨てる「無保険状態」の日本

①外に中国、北朝鮮、内に政権交代なき１党優位の危険性

②考えるなと言われ続けた日本人

③５５年体制の劣化版、２０２０年体制へ？　優位政党＋利益集団型小政党制

④野党はダメだという、都合のいい、あまい言葉

⑤あまりに非現実的な保守２大政党制！　まともな強い左派政党が必要

⑥鎖でつながれているかのように、同じところをぐるぐる回っている日本政治

⑦理想の政党を求めることの誤り、政党相性診断のむなしさ

⑧選挙による政権交代は１３０年間で一度だけ！？　追認するだけの形ばかりの民主主義

⑨１党優位では、急に政権交代しても無理、１回では無理

⑩大阪で定着した維新の会は例外。日本に必要な政党だが、とても危険な存在

⑪左派野党の課題

◎最も大切なことは何か？

①次の総選挙での政権交代と、新与党の経験の蓄積

　理想を捨てさせず、そこへ無理なく向かう現実的な手段を会得させる

②政権交代の定着＝１０年前後での自民党への政権交代

　自民党を単なる何でも屋から、癒着構造と切れた、まっとうな保守政党にする

③次の政権交代はなるべく左派野党への政権交代とする

　自民党に対する挑戦者をコロコロかえず、左右の基本の習得に努める

④いずれ世界的な協力が必要になる

　格差の拡大はいつか世界を不安定にする。その前に他国と協力して対策を実現する

◎今できることは何か？～変化の時代、もう遅いのだとしてもあきらめず、絶対にやるべきこと～

①野党統一候補か、いなければ野党第１党の候補に、まずは力を集めるしかない

　～選挙になれば当選可能性が最も高い野党候補へ、戦略的な投票を～

②理想の政党を求めず、全体を見る

　～自民ｖｓ維新にはなるべくＮＯを！　自ら考えて選択できるよう、

　左派野党（どうしても無理なら別の政党）を育てよう～

③進歩のない繰り返しを脱する

　～繰り返すとしても、らせん階段を上るように～

④公明党からブレーキを、維新の会からアクセルを、国民が取り戻す

　～政党間の談合から、政権交代の起こり得る、選挙による路線の選択へ～

⑤左派政党の、特に国防政策を現実的にする

　～リベラルだ保守だという、左派隠しの不要な左派に～

結び／製作者紹介

◎選択肢を捨てる「無保険状態」の日本

①外に中国、北朝鮮、内に政権交代なき１党優位の危険性

中国、北朝鮮の脅威があるから自民党政権が無難？
経済も自民党のほうが安心？ ✕

日本は必要な時に方針転換ができずに危機に陥る・・・鎖国、敗戦、バブル後不景気。自民党１強では方針転換ができない。経済は一流であったはずが、関係者との現状を守るための調整は限界を迎え、世界的な産業構造の変化から取り残されようとしている。実体経済が反映されにくくなった株価は、日銀や年金による買い支えの結果でもある。たとえ危機でも急がば回れ、野党に経験を積ませ、変化もさせて、政党間の競争、選択肢を確保する。

自民党政権の政策は、
それ自体よりもむしろ、
１党優位であるから危険！

特定秘密保護法：事実上の監督機関は内閣・与党。･･･現状では自分で自分をチャックする。
検察庁定年延長法：三権分立は、皆が尊重する微妙なバランスの上でしか機能しない。
任免権が内閣にあっても、その力をなるべく限定しなければいけない。
これはほんのわずかな例だが、政権交代があれば、新たな与党が前の与党のやり方をチェックできる。これがないと、優位政党が都合の悪い存在をつぶすために使う危険性が高くなる。
１党優位でスーパーシティ、ＳＮＳの誹謗中傷対策は大丈夫か、監視社会にならないか？
※野党の監視能力は限られている。
・・・国政審査権も過半数の賛成、つまり優位政党の賛成がないと使えない。

すでに自民党内閣による政治の私物化、
秘密主義政治が始まっている。

１０兆円の予備費、予算委員会や臨時国会の開会回避、モリカケ、スパコン、桜、そして記録の軽視、隠蔽・・・
※審議拒否に問題があるとしても、自民党も審議拒否をしていることを忘れてはいけない。
野党ばかり批判しているのは、国民が政権の監視をやめようとすること、自ら生んだ状況を笑っているのと同じ。それで誰が喜ぶか、考えることが重要。
維新の会はこのような批判をしているが、自分達の対案は軽視され続けている。
※与党とは権力を維持しようとするもの。一番の問題は国民が許し、甘やかしていること。
野党も問題ありだが、国民は政権交代なき１党優位を最も問題にし、政治の私物化に最も怒らなければいけない。

日本は民主的な国だから
独裁、恐怖政治の心配はない？ ✕

分かりやすい形で独裁になるとは限らない、じわじわと浸透するケースもあり、その方が危機に気付きにくいので、むしろ危険である。第２次安倍内閣以降の政策やスキャンダルを見ると、それぞれの問題は確かに大きくなくても、合わせると、すでにある程度危険な状態である。
そもそも、１党優位、１強多弱の状態自体に、独裁へと進む大きなリスクがある。

選挙とは、国民が情報をもとに考え、　→判断、→投票

公約と並ぶ重要な情報は、現状把握に関するもの。それをもとに、→ 内閣を評価。
現状把握が秘密主義にはばまれている日本の選挙は、自分の、あるいは家族の病状も正確に知らされず、言われるがままに手術の同意書にサインをさせられているようなもの。
総理の答弁も、はぐらかす、聞かれていないことを話して時間稼ぎ（野党の質問時間を奪う）
安倍前総理の自己過信と国民軽視。医師に例えるなら・・・
　安倍医師「病名？ 私が分かっているから大丈夫です。とにかく任せて。」
　　「説明はもういいでしょう？　私がやるんだから信じて下さい。」
そして、政権交代がないということは、セカンドオピニオンは無し。ということ
※政府の秘密主義、マスメディアの偏向、ネットニュースは玉石混交、各自のツールには
　は見たいニュース、主張ばかり。
→今判断する力も削がれるが、将来の日本は、歴史に学ぶことも出来なくなる。
人は過去から学ぶのに、都合の良い情報、歴史だけでは、この世界的な変化の
時代に、かつての戦争のように、判断を誤ってしまう。

野党には、本当は
自民党に移りたい
という議員がいる。
危機の時に本性が現れる。

第２党から第１党に議員が移るのでは、
いつまでたっても１党優位は変わらない。
変わらないから移りたい、の悪循環。
※野党陣営での協力、再編に助けられて
　選挙区で非常に強くなった議員が、
　それで自分の選挙区の自民党候補が
　当選の見込みを失うと、その選挙区が
　欲しい自民党に移れるようになる、
というバカバカしいケースもある。

②考えるなと、言われ続けた日本人

戦前は、議会は設けられたが政権は藩閥が決める。
戦時中は、「とにかく勝つまで考えるな」→敗戦
戦後は、　アメリカの価値観
・・・悪くはなかったが、自立できない国に。
　　第２党が理想主義に偏った、社会主義国
　　寄りの立場となり、国民は自民党一択に。
２１世紀は、自公連立
・・・自民党をおさえるのは公明党。
　　国民は黙って与党に票を入れなさい。

当選者が各選挙区１人の
小選挙区制と、
自民党内の疑似政権交代の相性は最悪。

※衆議院は小選挙区＋比例代表、参議院でも小選挙区がたくさんある。

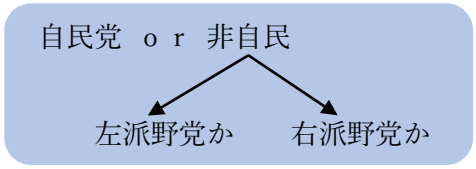
麻生副総理の考え：自民党内で強い派閥が２つできて、その２大派閥の間で「政権交代」。
　　・・・自民党と野党の政権交代ではなく、自民党内で政権交代
しかし今は小選挙区が中心の制度。だから各選挙区に自民党の候補者は１人しかいない。
つまり国民は、政党を選ぶように派閥を選ぶことはできない（政党もだいたい自民党）。
中選挙区の時代だって、土木に強い自民党候補、農業に強い自民党候補、選挙区内の一部の
地域で強い自民党候補がいて、選挙区の人々は派閥を選んでいたわけではない。そして、
国会の半分以上を占める自民党の中を、その中の半分の勢力を形成した田中派の流れが支配。
自民党の総裁（党首）が代わることで変化が起こる疑似政権交代すら起こらなくなった。
小泉ブームで優位派閥が小泉の森派に代わったが、強い者に群がる状況は変わらなかった。
さらに、世襲議員が増え、彼らとそれに群がる自民党議員達の、競争なき政治が続いている。

党首を代えればすべてリセット・・・

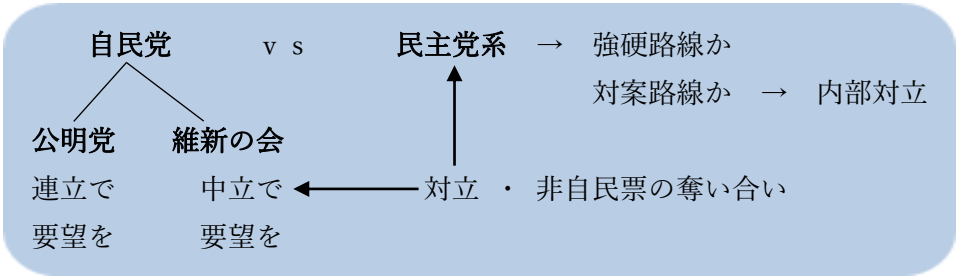
欧米も同様だが、野党時代に、敗因を分析し、弱点を補う人物を党首を選び、国民に支持される姿に変わろうとする。日本は与党が党首を変えるだけで内閣支持率が回復する。

自民党が負けない仕組み、野党の分断

1．自民党がずっと基本的には優位政党。
2．こだわりもあまりなく、ど真ん中に陣取って広く票を集めようとし、利益誘導政治になりがちな自民党に、より左、より右の人々が不満を持つ。
→１＋２で図のようになる。



これでは野党は勝てない。すると、自民党と対決し、政権を奪って政策を実現させるのではなく、自民党に、できれば連立を組んで、お願いするようになる。
５５年体制も、自民党と社会党が水面下で協力、または、公明党と民社党が自民党に協力することも。そして生まれるのは、下の図のような状況。



・野党第１党を含め、ほとんどの政党が自民党に売り込み合戦。自民党が弱い時、不利な時に多少は意見が通ることもあるが、自民党は選びたい放題（維新の会が自民党に寄れば、自民党は公明党に強く出られる）。自民党にはリベラルもいて、左翼から右翼まで相手を選び放題。政権交代、政権監視機能が崩壊。新型コロナ対策を民主党系が次々に打ち出したことは高く評価できても、誰が自民党のハートを射止めることができるか？という競争になりかねない状況でもある。それでは自民党に都合の良い案しか採用されない。
・利権が問題の自民党に、他党はお願いするだけの利益団体になり（特に創価学会の公明党、大阪の維新の会）、国民から選択する権利を奪う（国民が選択しない結果でもある）。
・野党第１党は、利益団体になることを拒んだとしても、「何でも反対」の悪役に仕立て上げられた状態は変わらない上に、さらに勝ち目のない戦いを強いられ、動揺する。
・資金、人材が自民党に集中し、優位、劣位がさらに固定化。自民党にぶら下がるいわゆる「金魚のフン」は、フンで固定。自民党から出られなかった人が、理念、政策に関係なく他党から出馬する。そしてチャンスがあれば自民党に移るという、恥ずべき状況が続く。何より、理念Ａ、理念Ｂ、そして政策パッケージＡ、政策パッケージＢから選ぶ、という選挙にならない。
※選挙で自民党が大勝を続けているのは、どんな理由があっても、一応は国民が出した結論。それを他党がアクセルやブレーキになって良いのか、という問題もある。自民党に票を献上したり、野党の選挙区に候補者を立てて野党を負けさせて、自民党の役に立てば良いのか？信仰≒選挙活動で、理念より保身のために強い党と組む事を優先する創価学会・公明党も問題。
※戦前の日本は、国民の手の届かないところで政権が決まるだけではなく、衆議院、貴族院、枢密院、軍部が拒否権を持っており、国として責任の明確な決断ができなかった。戦争を国民が、自分達にも責任があるものとして受け止めることも難しかった。

選挙で何十議席減ろうが、自民党が第１党のままなら、それは自民党の勝利であるはずが、それを自民の敗け、野党の勝ちとして少しだけスカッとする風潮。

・・・政権交代が実現しなければ、いくら野党が増えても、減るよりは良いが、負け。

支持団体べったりの内閣も問題だが、支持団体を裏切っても、他から票を調達することができる優位政党が、政権党の立場を維持できるというのもおかしい。

→優位政党を支持しなければもっと不利になると心配する支持団体が自民党支持に戻る。

③ ５５年体制の劣化版、２０２０年体制へ？

優位政党＋利益集団型小政党制

②で見たようになると、野党第１党はさらに不利、孤立、苦しい立場に。

少しでも票を減らすとよけいに勝てなくなるのがこわい。
→変化しにくい。思い切ったことが出来ない。
→なんとかして勝ちたい野党第１党の中が、２つに割れる。
（これは自由党系優位の明治時代から）

⬇

１．強硬路線：とにかく自民党を困らせる→ボロを出させることで政権交代を狙うが、注目されると同時に批判も受ける。

２．対案路線：政策で勝負・・・報道されない。← 国民の関心が薄い。

⬇

党としてのまとまりが失われることで、政権交代がますます遠のく。
→野党第１党も水面下で自民党と調整（国対政治）。自民党にお願いするという動きで、野党第２党以下と競合するような事態になる。
そうなれば、その「おこぼれ」成果を選挙で競い合うということにすら、なりかねない。

※野党第１党に政権交代を実現させる力、魅力がなく、３分の１だけは確保して、改憲を阻止することで満足している状態（現状はそれにも届いていないが）。国対政治について、５５年体制に戻ったという批判があるが、公明党や維新の会が自民党にぶら下がること、民主党系と野党共倒れをすることで、ますますそうなる。あるいはそれすらなくなり、自民党（＋公明党）だけで全てを決めるようになるということを忘れてはいけない。
維新の会が野党第１党を批判をするなら、自らが遠くない時期に、政権交代が起こすほどに強い野党第１党にならなければけない。
※「対決」も「解決」も必要なのに、現状は、癒着＋何でも屋の自民党への挑戦権を巡って、野党間の死闘、互いの不幸すら願って左右が対決、その左右も古いと消してしまえば、単に正しい、正しくない、または時代に合っている、あっていないというような、より独善的な対立になる。
※たとえ報道が委縮したり懐柔されたりしても、野党議員が自民党と対決し続ければ、国会中継ではそれが画面に映る。

④野党はダメだという、都合のいい、あまい言葉

この言葉で、誰が喜ぶかを見るべき

・・・それは選択肢をさらに傷つけられる国民ではなく、監視者が弱ることで不当に強くなる権力者とその周辺。

野党が楽だというなら政権を任せて苦労させるべき

・・・あきらめるのではなく、育てる。

※株で言えば日本人は、下がった時にあわてて、その安い値段で売る。そしてそのお金で別の株を買って、それがまた下がったら、あわてて売るということを繰り返して、資産を減らしているようなもの。

だまされないためにも、なぜ、どう駄目かを理解し、政治を「天の上」から地表に下ろす。

左派政党は戦前の弾圧、戦争（党の左派等が反対）の影響で、非現実的になりすぎた。
・・・警鐘の役割は重要だが、それが強くなり過ぎた。そればかりになり過ぎた。
→しかし政権を担うと現実的になる（村山内閣、民主党政権）。
→これは裏切りであることも多く、支持者から批判を招くが、これこそ重要な通過点。
…理想的な政治とは、異なる理念、やや似ている現実的政策を持つ２つの大政党（多くの政党がある場合は２のブロック）が、互いに監視し、切磋琢磨し、交互に政権を担う政治。独善的にならず、与党は、危機には素早い対応をしつつ、今できること、やるべきことを割り切って行いながら、一歩一歩しっかりと理想の方へと、進んでいく政治。
国民は、不慣れなことによる失敗を、批判しつつも簡単には見捨てないという根気を持たなければ、いつまでたっても受け身の存在、政治は天の上。

⑤あまりに非現実的な保守２大政党制・・・まともな強い左派政党が必要

極端に言えば、国家とは、その政治とは、暴力などによって殺されないためのもの。
・・・軍隊、警察、救助隊

貧しさなどで死なないためのもの。・・・社会保障

弱い立場、弱い立場になりやすい人々のための大政党が必要。
それが、平等重視ではあっても、社会主義国のような独裁を否定する社会民主主義政党。
だからどの国でも存在するし、普通は、しばしば政権を担う大政党である。

保守２大政党制の国もあるのでは？ ○

ただし国内に、より大きな対立があった。
・・・アメリカ：中央集権か、各州に国のような権限か。
※アメリカでは民主党が、社民系の役割（労働者の代表）を担う。
カナダ：アメリカと似た面もあるが、イギリス系とフランス系の間の溝もあり、複雑。イギリス（宗主国）重視かアメリカ（隣国）重視か。
アイルランド：全島のイギリスからの独立か、東北部を除いた独立の容認か。

自民ｖｓ維新だとどうなるか

・・・「関係者、選挙区へのバラマキか新自由主義か」などとは、自民党は公言できない。
→急いで改革ｖｓ慎重に改革。あるいは、改革やるｖｓやらない。
しかし、改革とはどんな国にするための改革なのか？ これで国民は選択できるのか。
とにかく改革か（維新）、とにかくみんなの意見を聞いてうまくやる（自民）という、事実上の白紙委任にならないか？

・理念の違いに乏しくなりやすい保守２大政党では、日本では強い方の政党に弱い方の政党の議員が流れて、そもそも対等にならないのではないか（保守系の野党議員には、自民党に移った者が非常に多い）

・自民党でも維新の会でも、例えば竹中平蔵氏のような同一の利害関係者（新自由主義的な政策を内閣に進めさせ、それで得をした企業へ）と結び付くなどして、政権がどちらになっても（それ自体考えにくいが）、
一部の富裕層だけが得をする政治になりかねない。

それにしても、右ｖｓ左というのはもう古いのでは？ ✕

左右の分類は古くて新しい。ＩＴ技術の発展、グローバル化による変化で、格差は拡大している、教育は無償化するとしても、競争後の格差が拡大すれば、健康にかかわる食生活の格差、医療の格差が問題になる。命に関わる較差が認識されれば、やがて不満が爆発することになる。一方で大企業、ベンチャー企業の双方をバックアップすることも確かに必要（左派政党も軽視すべきでは全くないが、ある程度競争重視の保守政党がより重視すべき政策）。日本の左派政党は、民進党大分裂、コロナ危機を契機に、良い変化を起こしている。左派ポピュリズム政党れいわ新選組の誕生、柔軟な国民民主党、対案アピールをより重視するようになった立憲民主党。

他にどんな対立軸があり得るか？ 高齢者ｖｓ若者、都市ｖｓ地方？

これらは分断、悪くすれば片方の犠牲を深刻にしてしまう。右（競争重視）と左（平等重視）の立場から、それぞれ現実的な対策を練って競うことは十分可能。

※競争重視は≒消極財政、平等重視は間違いなく積極財政だが、左派政党等とポピュリズム政党との間には差異が生じている(日本では本来は消費減税に否定的で財政規律を重視する立憲民主党等と、消費税廃止、国債増発を唱えるれいわ新撰組）。左派勢力が共倒れしては最悪であるから、双方の融合か、不可能に近いがどちらかの選択が必要になる。※富裕層ｖｓ貧困層という対立が明確になるのも危険だが、右ｖｓ左にはすでに、世界的な経験の蓄積がある。現在の変化（≒既成政党ｖｓポピュリズム政党への移行）も、この基本の上にある。危険性はあるが、それを言うなら、日本が基本をマスターせずに移行するのはもっと危険（維新の会、れいわ新選組の浮上自体は良いことだが）。

※集権ｖｓ分権についても、分権が善、集権が悪になると問題だが、集権・癒着体制を変えるには良い。ただし２０１７年頃のように東京・名古屋・大阪の連合になると、都市部至上主義になりかねない（過疎地に痛みを強いるような策が必要になることはあっても）。

※開国ｖｓ鎖国というのが大げさに言えば、欧米の左右の既成政党ｖｓ左右のポピュリズム政党の対立（政党内の対立である場合もある）。開国は富裕層、鎖国は非富裕層に支持されやすいが、どちらか一方を目指すことが難しいからこそ、与党となったポピュリズム政党も苦しんでいる。他国との友好関係、非富裕層自体が安価な輸入品に頼ってもいる（低賃金であるためか、その反対か、今となっては鶏と卵の関係だが）。

→上の左右の区別を前提に、それぞれがそれぞれの立場から現実的な策をとるしかない。

日本の左派は非現実的すぎるのではないか？ △

そういう面は確かにはあるが、政権を担うと変化する（村山社会党が自衛隊、日米安保、消費税肯定に、鳩山民主党、普天間基地県外移設断念。これらは裏切りであったが、左派政党が与党になっても無茶はしにくいというのは確か。
※むしろ現実に流され過ぎる危険性の方が大きい。
※国防については警鐘を鳴らす存在、平和主義は重要であり、左派政党が現実に追われた時、それをどうするかこそ課題（イタリアの共産党は民主党になり、政権担当能力を示した）。

民主党系はきれいごとを言うけど、公務員や正社員だけの味方でしょ？

それらの労働組合の意向にそって動くことも多いが、民主党系は格差を問題にしている。情報化社会で既存の中間団体は弱る。代替物は必要だが、これからは満遍なく一定の平等化・弱者救済を目指す時代（同一労働同一賃金、最低賃金、教育無償化、児童手当、給付付き税額控除、最低補償年金、ベーシックインカム。富裕層に対する課税強化は、その国外流出を招く危険があり、左派政党も躊躇しがちな面があるが・・・）
※新自由主義政党も、既得権益廃止、規制改革でみんなにチャンスを、教育無償化等で機会の平等を確保する、そんな真の平等重視が自分達だとアピールする。しかし基本的には雇う側との関係の方が強い保守政党は、温情主義（上からの、不満を抑えることを主眼とするもの）となりやすい（左派政党もこれと無縁ではないが）。
※民主党系、その所属議員が不十分なら、より小さな政党にかわりを求めるよりも、集まって声を届け続けるか、左派ポピュリズム政党との、長所を生かし合う協力関係の構築を求めることが重要。
※公務員、正社員の好待遇を問題にすると、ストッパーが外れ、被用者全体の待遇が悪くなる危険がある。・・・皆が「下」に合わせる社会に。

⑥ 鎖でつながれているかのように、同じところをぐるぐる回っている日本政治

1．現実的、機会主義的な政党が優位政党に（戦前、終戦後の自由党系→自民党）。
2．優位政党に対抗しようとする第２党は、理想主義的、対決型の色を強める（戦前、終戦後の改進党系、戦後の社会党→民主党系）。
　※戦前は、藩閥－自由党系（優位政党）－改進党系という１列の関係が出来ていた。
　　→政治の中心は藩閥であったが、議席が多く、どちらとも組める自由党系の力が強まっていった。
3．非常にまれだが、優位政党が主に権力争いのために分裂（離党者が第３極になることも）。
4．第２党が優位政党に対抗しようと、他の政党、会派、無所属議員と合流、名称が変わる。
　※この時など、優位政党の離党者を迎えて党勢を強めようとする傾向がある（藩閥の伊藤博文を党首に立憲政友会を結成し、後に藩閥の田中義一を党首に迎えた自由党系、藩閥の桂太郎の、立憲同志会結成に参加した改進党系の約半数。日本自由党出身の芦田均、鳩山一郎を党首に迎えた終戦後の改進党系、自民党出身の鳩山由紀夫、岡田克也、小沢一郎を党首に選出した民主党）。この経験から、野党は優位政党の分裂に期待することが多い（例えば加藤の乱、石破氏への期待）。
5．内閣との対決重視路線か、是々非々・対案路線（戦前は藩閥系の内閣への歩み寄り）かという２つの選択肢、無理な合流によって第２党の内部が二分化し、やがて分裂（藩閥に対する自由党系も同様）。

６．第２党に失望して、第３極、特に自民党離党者によるものが浮上、ブームが起こる。
７．第３極が内閣、優位政党と組むか、他の野党と組むかで分裂。
※新党ブームで浮上する新党は、自意識が強いスター政治家が率いており、他の、政策が似ている政党とすら協力が困難。スター政治家が飽きられたり、失望されると消えていく。
８．優位政党が、他党の離党者や無所属議員を吸収して拡大、名称は（あまり）変わらない。
９．第２党が第３極の一部と合流し名称を変える。
２に戻る（ただし、終戦後は１からやり直し、自由党系の優位が復活）。

※2019年参院選における新党の議席獲得も、サラリーマン新党などの、過去の繰り返し。
※優位政党には権力志向の議員が集まり、
第２党（野党第１党）には反権力、理想主義的議員、優位政党の党内抗争に敗れた議員が集まる。

・繰り返し起こるブーム、しかも増えてきている。
しかし結局、自民党ｖｓ社会党の流れ（現立憲民主党）に戻る、変わらない。
…左右の対立がスタンダードなのだから、これは当然。自民党が皆にいい顔をする富裕層の政党から、競争重視がより明確な党へ、自民党に切られた国民が左派政党へ、という変化が必要。
※今欧米で問題となっているのが、左派政党が弱い人々（豊かでない人々）の味方になっていない、きれいごとの政党になってしまっていること→左右、主に右のポピュリズム政党の躍進（米英では２大政党内での、そのような勢力の台頭）。
…日本の新党にも、これに当てはまるところがある。

１９５５年の鳩山ブーム
･･･国民は吉田茂(鳩山一郎から自由党系を継承)の長期政権にあきて、そのごう慢さをきらった。→しかし１９６０年には吉田系中心の政治に戻り、それが２００１年まで続いた。
１９７６年の新自由クラブブーム
１９８９年の土井社会党ブーム
１９９２年の日本新党ブーム
１９９３年の新党ブーム
（日本新党、新生党、新党さきがけ）
２００１年、２００５年の小泉自民党ブーム
２００７年～２００９年の民主党ブーム
２００９年のみんなの党ブーム
２０１２年の維新の会ブーム
２０１６年～２０１７年の小池ブーム
（都民ファースト、結成時の希望の党）
２０１７年の枝野立憲民主党ブーム
･･･次は吉村維新ブーム？
※しかし状況がほとんど変わっていない。
本当にブームと呼んでいいのか？

・自民党出身者による新自由主義的新党に期待しては忘れ・・・

新自由クラブ（自民党離党者が結成）
※新自由主義的な面は小さい。
日本新党（自民党出身の細川護熙氏が結成）
新生党（自民党離党者が結成）
新党さきがけ（自民党離党者が結成）
※新自由主義的な面は小さい。
みんなの党
（自民党を離党した渡辺喜美氏らが結成）
日本維新の会（自民党離党者による大阪維新の会の国政政党）
希望の党
（自民党を離党した小池百合子氏らが結成）

※新自由主義ではないが、自民党よりも右のポジションに活路を見いだした、**たちあがれ日本**（次世代の党）の系譜もあった。

・優位政党は議席が減っても強くなる？
…優位政党とはいえ、まれに分裂や選挙での敗北により、比較的大きく議席を減らすことがある。次の選挙もまだ先で、優位政党に入りたい議員の引き抜きでも回復できない場合には、他党と連立を組むことになるが、それは圧倒的に自民党優位のものとなり、連立相手は埋没する。特に公明党との連立で自民党は、多くの選挙区で結果を左右することがある創価学会の票を獲得した。

・なぜ変わらないのか、それは、
クライエンテリズム保守（支持の見返りに利益誘導）vs新自由主義的保守では
選択肢として不足で、前者の組織票が多すぎるから。・・・後者はブームに依存
※議会政治の先輩たちの基本は、政権交代のある、保守vs自由 → 保守・自由vs社民

・日本は戦前、藩閥が政党に否定的であったために、２大政党が共に自由派。
→これらがかつての保守政党の色も帯びて、戦後合流して自民党に（他にも共同主義、
農民政党など、中道的な政党をいくつも吸収）、とにかく社会主義以外全部、
何でもありの政党に。
→自分たちが権力を失わないための政党になる。
＝票をくれそうな人々にとにかく予算をつける。
→政策競争から利益分配競争となり、党内の競争もなくなり、１派閥優位に。

※本当は維新の会と民主党系の２大政党（＋小党）で良いくらいだが、優位政党の自民党が
急に消えれば、変化が急激なものとなり、不安定になるリスクがある。イタリアは
そのような道を歩んだが、日本ではそもそも不可能に近い。

⑦理想の政党を求めることの誤り、政党相性診断のむなしさ

・ずっと改革を求めながら自民党優位を変えられなかった日本人。
それは自民党へのちょっとした反抗と、変われない自分達への危機感の表出でしかない。
・理想の政党ができても、それに政権を取る力があるかどうかは別、時間をかけて育てるのは
良いことだが、その間、１党多弱、⑥で見た繰り返しの中で、溶けてしまう。
・相性診断で自民党以外の政党と相性が良いと出てもどうしようもない。その政党に投票する
ことで、それが他党と共倒れして、むしろ自分にとって悪い方向に作用することが十分あり得る。
例えば維新の会は必要だが、左派野党の票を削れば、守旧派自民党が強くなる。
→戦略的な投票、その、国民の多くが共有できる戦略の、議論による形成が必要。

⑧選挙による政権交代は１３０年間で一度だけ！？
追認するだけの形ばかりの民主主義

・選挙結果を受けて政権が代わったのは、以下の通り。
１９２４年：藩閥系から護憲３党へ。しかし選挙前から護憲３党の議席は過半数。
１９４７年：自由党系・改進党系から、社会党や改進党系（民主党）へ。
しかし選挙前から社会党や改進党系で過半数。
１９９３年：自民党から非自民・非共産各党へ。
しかし自民党分裂によって、選挙前から非自民・非共産で過半数。
２００９年：自公２党から民主党、社民党、国民新党へ。
２０１２年：民国２党から自公２党へ。しかし常態であった自民党政権に戻っただけ
なので、政権交代とは言い難い（政権交代が定着すれば、選挙による
政権交代に含めることができる）。
１９２４年と１９４７年の総選挙は、確かに、総選挙で新たに第１党となった政党が
首相を出した。しかし、前者は優位政党であった立憲政友会（自由党系）が
真っ二つにならなければ、立憲政友会が第１党であり続けた可能性が高く、
後者でも保守２党を合わせれば社会党を大きく上回り、実際に民主党の議員の
一部が自由党に移ったことで、社会党は第２党に転落した。総選挙後の連立の
組み合わせを国民が予想するのも難しかった。したがって、
文句なしの総選挙による政権交代は、２００９年の１回だけということになる。

それだけ聞くと異常だが、本当にそんなに珍しいことなのか？

○

めずらしいというか日本だけ。
※ただし、人種差別等の影響が残る独裁、野党が弾圧される国を除けば。
大統領制であるが、韓国、台湾でも政権交代が定着している。
（韓国は習得中であり、決してあなどれない。）
他の先進国では１０年前後（２期～３期）、どんなに長くても、普通は２０年以内には、政権交代が起こるもの。ところが、日本の自民党の場合は次の通り。
１９５５年～２００９年、２０１２年～２０２０年現在まで自民党が第１党
自民党は結成されてから約６５年だが、うち約６２年間は第１党。議会ができてから自民党ができるまでの約６５年間は、いくつかの例外を除き自民党結成の中心となった、自由党系と改進党系が２大政党であった。

１８５５年～１９９３年、１９９４年～２００９年、２０１２年～２０２０年現在まで与党第１党（１８５５年～１９９３年はほとんどが単独政権）
自民党は結成されてから約６５年のうち、約６１年間は与党第１党である。
前身も見ると、戦後ほとんどの期間、政治を動かしていたと言える。

※例外的な国はスウェーデン
１９１４年から２０２０年現在までの約１０６年間、社会民主労働党がずっと第１党である。それでも半数を上回ることはほとんどなく、政権交代はある。
ただし１９３６年から１９７６年までの約４０年間は、社会民主労働党が中心の政権か、同党の単独政権が続いた。１９７６年以降も、社会民主労働党中心の政権の期間が長い。
それでも２００６年から２０１４年まで約８年間、非社会民主労働党の政権が続いた。
優位政党は、従来の権力側である保守政党ではなく、平等重視の社会民主主義政党であり、しかも選挙による政権交代は定着していると言える。
これほどではないが、似た国はわずかにある。しかし、少なくとも政権交代は定着している。
かつて日本と似ていたイタリアは、自民党から小沢氏らが離党したのと同時期に優位政党が解体、その後迷走も見られるが、国民が責任を持って選ぶ政治に。

政権交代自体はもう少し多くあったんでしょ？

△

あるにはあったが、それこそ異常な、追認の「実のない民主主義」
※ 最初はそれも進歩だから良いが、ずっと変わらないのは問題。

・戦前、約８年続いた政党内閣期（その前は藩閥のトップが政権を決めていた）
Ａ党内閣が行き詰まると、元老（当時は西園寺公望）がＢ党の党首を総理大臣にする
→Ｂ党はＡ党より議席が少ないので衆議院を解散
→まだＢ党内閣になったばかりなので評価のしようがない＋与党に投票したい
→総選挙でＢ党勝利
→Ｂ党内閣も行き詰まり・・・今度はＡとＢを逆にして同じことの繰り返し
国民は与党を勝たせ続けただけ。

・改めて、１９９３年に自民党が初めて野党になったケースを見ると・・・
自民党から小沢氏らが離党して新生党を結成
→この分裂で自民党が過半数割れ
→総選挙で自民党の議席はほとんど変わらず
＝減らなかったが、過半数割れのまま
→非自民連立政権誕生　　国民は現状を追認しただけ。

でも自民党が良い政党だから変えなくて良かったんでしょ？

△

戦後日本が発展したのは自民党政権の時だが、時代が良かったということもある。
完璧な人間がいないように、完璧な政党などない。
…自民党内閣で出来なかったことは、例えば・・・
・福島第一原発の事故の回避（事故当時は民主党政権だが、建設当時はもちろん自民党政権。自民党政権期に、すでに問題点が指摘されていた）。
・少子化の改善（他の先進国も苦労している課題ではあるが・・・）
・バブル崩壊以後の経済の低迷からの脱出（非自民政権はごく短期間。自民党政権で多少の成果が見られたことはあったが、変えなければいけないことがあまり変わらなかった）
・他国に後れをとらない「第４次産業革命」産業構造の転換

野党がだめだから政権交代したくてもできなかった？

△

野党第１党の日本社会党は、社会主義政党からの脱皮にてこずった。
しかし、政党は国民の鏡、国民が育てるもの(右派を伸ばすなど、方法はあった)。
さらに冷戦終結後、社会主義政党からの脱皮は明確に実現した＝民主党の結成。
※ただし独力ではなく、自民党離党者との合流によって。
政権担当能力を身に付けるには、どうしても与党経験が必要（自民党の祖先も初めて政権を得た時はひどい猟官運動、約４カ月で崩壊に至るほどの内紛：隈板内閣）。

政権交代がないことの問題点

1．政権運営を現にしている優位政党が、冷静に政策等を点検できない。
2．優位政党におごりが見られるようになる（一方で小選挙区制だから野党を警戒）。
3．政官財が癒着し、腐敗する。
4．人材が偏る。
5．一部の野党が与党にぶらさがる。
6．注目されない第２党（野党第１党）が、「何でも反対」に走るようになる。
7．いざ政権を交代させても機能しない。
8．必要な時に、国が変化をすることができなくなる。

優位政党は忙しく、みんな不満があってもついて行く。→ 反省する時間、機会がない。
弱いなりに一定の規模を持つ野党第１党は、少しも票を失えないから守りに入る。
→ 姿勢明確にできない、挑戦できない、党の悪い点を変えられない。

⑨ １党優位では、急に政権交代しても無理、１回では無理

日本は民主主義国なんだから、いざとなれば選挙で政権交代させればいい。

△

「いざとなれば」では遅い。… ずっと野党である政党は与党経験を積めない。
選挙で突然勝てば、急に議席を増やすのだから新人ばかりに。
※政権交代が定着していれば、かつて議席が多かった時に議員であった候補者も多く当選するから、新人ばかりにはならない。なにより、自民党に我慢に我慢を重ねた後の政権交代は、怒りをともなうもので危険。その怒りは経験不足の新たな与党にも向かう。
・２００９年の政権交代は、左右の基本を踏まえていたし、苦しみの中の大きな一歩であった。
初めて補助輪なしで自転車に乗ったようなもの。転んで当たり前、そこからが練習。
一度転んであきらめたら、一生乗れない。

⑩ 大阪で定着した維新の会は例外。
日本に必要な政党だが、とても危険な存在

・維新の会を評価する理由

1．動きの鈍い日本の政治で、てきぱきと動く政党であること。
2．強者、弱者を固定させず、産業を発展させるための競争、スタートラインの平等を重視する自由主義政党は必要。新自由主義的である点でアメリカやイギリスの保守政党に近く、スタートラインに限った平等は、欧米の左派政党（社民系）の「第３の道」に近い。
3．主張が分かりやすい。
※負の面もあるが、「これだけはやりたい」は日本で支持されやすい。
4．維新の党を離党するなど、勢力の縮小をいとわないような、勝負ができる。
※ただし大阪における勢力さえ守れればというのでは、全国政党としては問題。

・しかし支持しない理由

1．政権交代の定着がさらに遠のく。下手をすれば政権交代が起こらない危険がある。
※「民主党系よりも、自民党にとっては手ごわい相手だ。」という見方もあるが、自民党１党優位 → 自民党にぶら下がって一部実現 → 自民党１党優位の悪循環を脱することが出来るのか？
※既存の野党第１党であり、欧米の２大政党の一方である社民系（民主党系）と、維新の会はつぶし合いをする。喜ぶのは権力を握っている自民党、保守勢力。
2．日本はまだ中央集権的であり、維新の会は大阪重視である以上、優位政党の自民党と協力関係を結ばないと、大阪で政策を実現させるための法案の成立等が実現しない。しかしそれでは自民党内の力関係に左右されるし、国民の選択権を奪ったまま、自民党にぶら下がる中小政党の一つという域を出られない。
3．自民党にも新自由主義的な面はある。冷戦終結後の新自由主義的改革の競争が再現され、新自由主義オンリー、財界の一部のための政治オンリーになってしまいかねない。
4．スタートラインの平等ばかりで、格差拡大の問題が解決するわけではない。
5．スター政治家が敵を指定していく政治の危険性。
※強い立場にあるわけではない人々が、敵に指定される危険もある。
6．左派野党の自民党批判にただ乗りして、自分たちは大人だという姿勢。
※権力を持つ万年与党という背景があっての野党の攻撃性なのに、背景を軽視して他の野党の評判を下げる。しかし、左派野党の自民党批判は国民の印象に残るから、その批判票の一部～多くを、ただで自分のものにできる。
検察庁法の問題のように、自民党が批判された時、「維新の会は反対してないよ」と、自民党が言えてしまう。優位政党である自民党に都合の良い野党分断。
7．あの性質で国政を担える大政党になれるのか、野党第１党の苦労が分かっているのか。
※小党が合流、もめれば大阪純化、党内での大阪系の圧倒的優位、党勢急拡大で新人だらけになって、安定して国政を担えるのか。
※自民党への本当の挑戦者になった時、批判をより受ける立場になった時、これまでの荒々しいやり方は通用しなくなるのではないか。
※今度は維新の会が左派野党の候補者擁立に苦しむことになり、結局自民、へたをすれば自社さ連立の再来、ということも。(自民党が維新寄りと民主寄りに分裂すれば良いが)
※「失敗しても大阪があればいい」と思っていないか？
※維新の会のやり方は農村部に通用するのか。
8．潔癖に見えて実は誰でも吸収している。鈴木宗男氏、下地幹郎氏など、新自由主義に反対の立場であったと言える議員達。そして真偽は不明だが、セクハラ疑惑で立憲民主党を離党した議員を会派に加えている（比例選出なので入党は不可能）。
足元の大阪で公明党とすみ分けをする取引きは、政策実現にはプラスだが、その選挙区の国民から選択肢を奪う。

・**維新の会は総選挙をどう戦うのか。**

左派野党と協力　　ｏｒ　　単独で戦う
↓　　↓
自公過半数割れ　　自民圧勝
↓　↓　　↓
非自民連立ｏｒ自公維連立　　安倍・菅中心の政治が維持されれば、良好な関係が力に？
↓　↓　　↓　　↓
大阪関係は、特区の要望などいろいろ実現？　　いずれ野党第１党・自民党の挑戦者に？
↓　　↓　　↑
大阪をベースに、今度は民主党系を少しずつ吸収し、大阪派主導を維持したまま、
近畿地方全体に拡大

・**維新の「売国」と左派の「売国」**
左派野党は中国や韓国寄りだと言われる。維新の会は大事なインフラを外資に売ろうとするなど、グローバリズム的な面が批判されることがある。これらは冷静に評価する必要がある。どちらも極端な批判。どちらかが１００％正しいと言うものではない。なんでもバランスだが、売国と言われないために右翼的な主張をするようになると危険。

⑪ 左派野党の課題

・**民主党系による、民主党政権の総括と、改善策の決定、それらの公開**
…これが客観的、かつ具体的であれば、必ず支持を広げられる。

・**民主党系による、「税と社会保障の一体改革」の現状に対する評価と、その改善策の提示**
…改めて。消費税増税分が法人税、所得税の減税に回っているという指摘にどう答えるか。
消費税を下げないのであれば、その使い道について、自民党政権の現状と比較して示すことが重要。
※高福祉・高負担は非現実的で、現状維持・負担増も、
豊かでない人々が受け入れるだけの策、信用が政府にない。
→これらについて、れいわ新選組と国民の前で議論をする。
→足して二で割るのではない一致点を見いだす。
…それが不可能であれば、国民に審判を求める。

・立憲民主党の独善性（逃げ？）の改善
…例えば山本太郎氏の消費税廃止（５％での一致）の提案、
橋下徹氏の候補者予備選挙の提案を、議論なしに否定している状況。
※しかしこの点では少しずつ変化も見える。
くさらずに対案、提案をアピールしているのも良い傾向。

・自民党と維新の会の距離が近いのだから左派政党は団結するしかない。
…社会民主主義・左派ポピュリズム連合（イタリアで実現している）
…　支持基盤がある民主党系　・　無党派層、若者の支持に期待できるれいわ新選組
政権運営の経験がある民主党系　・　しがらみがなく、弱者の立場に立てるれいわ
優秀な議員が残っている民主党系　・　頭脳明晰、カリスマ性のある山本代表

支持率の比較的高い立憲民主党／柔軟な、聞く耳を持つ玉木代表の
国民民主党／民主党系に期待できない左の有権者を引き付けられるれいわ新選組

これらの、良い形での協力と、維新の会との違いを明確に示すことが必要
…維新の会のやり方では解決できない問題、救えない人々は何か、誰か？
それをどう解決するのか、救うのか。

・左派野党の合流はあっても良いが、不要であった。
…合流しても支持率が下がる可能性がある。それぞれが得意とするところで票を集めた方が、
比例区で死票が増えても、合計の議席が多くなる可能性もある。
合流する方が効率が良く一体感が増す反面、合流や分裂で人間関係が悪くなるリスクもある。
※旧民主党系の差異は、理念、政策よりも、これまでの経緯にある。
…立憲民主党：民主党政権の失敗からバラ色の公約に慎重。
結成時の危機感、結成後の躍進から、民進党再興に消極的であった。
待っていれば、野党陣営のライバルが弱ると考えているふしがある。
…そんなに甘くはないし、消えたとしても、また現れる可能性は高いから、
それを前提として戦略を練る必要がある。
国民民主党：第２党（民進党の衆議院議員、候補）が、差異の大きいはずの小さな新党
（希望の党）に合流したことによるイメージダウン。
立憲民主党に吸収されることに対する拒否感。
生き残るために柔軟にもならざるを得ない。
共産党とは絶対に協力したくない議員がいる。
…他の左派野党よりも自民党、維新の会と組みたいという議員がいる。
→ 改めるか、いっそ離党してもらった方が迷走による支持低下を防げる。
例外：国防政策について、国民民主党に現実的な議員が比較的多くいる。
…これは左派陣営で貴重。議論すべき（平和を強く願うリアルな国防）。
再編の評価：立憲民主党の党名が残る中、国民民主党、社民党の党名も残ったことは痛手。
そのマイナス面を小さくするような、国民の関心を集めるアピールが重要。
・・・菅内閣や維新の新自由主義的路線とは別の、選択肢を示すしかない。

・政党は中身！だがリーダーのカリスマ性、人気は重要。
ダメな勢力がそれを隠すためにそのような人物を担ぐというのでは見抜かれるから、
左派勢力自体がもっと信頼されるものにならなければならない。
自民党の小泉進次郎氏（世襲議員の一人に過ぎないことが知られてきたが）
維新の会の吉村洋文氏（橋下氏の政界復帰もあるかも知れない）
に対抗し得るリーダーが必要。
→民主党系にもそうなり得る議員はいるが、今はやはり山本太郎氏。

・左派野党を新自由主義、右派ポピュリズムの立場ではなく、
左派ポピュリズムの立場で批判するれいわ新選組の重要性を認めること。
…弱点を克服し、左派政権を実現するための、ポジティブな「対立」となり得る。
※ただし譲歩も必要。民主党系もれいわ新選組も平等重視であるのだから、議論すれば、
それを犠牲にしない合意は可能なはず。民主党系は弱い立場の人々の味方でないと言うのなら
（現在欧米で社民系に対して起こっている不満）、議論→国民の審判によって、
左派陣営でれいわ新選組が優勢になる。

・左派連携の在り方
1．れいわ新選組の政策とは別の政策によって、れいわ新選組の求めることが（ある程度）
実現可能かを検証 → それも材料に、民主党系やれいわ新選組の大まかな政策の一致を図る。
2．正規雇用の現職が中心である支持団体（労組）を支持基盤とする民主党系に、れいわが集める
他の声を合わせる形で、働き方の問題、労組の変化に取り組む。
3．れいわ新選組の消費税減税、富裕税、国債増発を、それに否定的な他の左派政党が、
その弊害が出る兆候をチェックしつつ、進める。
4．れいわ新選組のカリスマ性を生かした選挙戦術。
5．民主党系がより現実的になり、共産党、れいわ新選組が現実への安易な妥協をチェックする。
6．国民民主党が、可能であれば、左派政党と維新の会のパイプ役になる。
※左派政党と維新の会が、自民党を利しない最低限の協力をする。
7．合流する場合は、国民の注目を集めるような理念、政策の議論、政策のコンペティションの
ようなものを行う。

◎ 大切なことは何か？

①次の総選挙での政権交代と、新与党の経験の蓄積
・理想を捨てさせず、そこへ無理なく向かう現実的な手段を会得させる。

②政権交代の定着＝１０年前後での自民党への政権交代
・自民党を何でも屋から、癒着構造と切れた、まっとうな保守政党にする。

③次の政権交代は、なるべく左派野党への政権交代とする。
・自民党に対する挑戦者をコロコロかえず、
左右の基本の習得に努める（さらなる変化はそれと並行して、最終的な政界再編などで）。

④いずれ世界的な協力が必要になる
格差の拡大はいつか世界を不安定にする。その前に他国と協力して、対策を実現する
・ＩＴ技術の発展、グローバル化で格差は世界的に拡大。
→「下層」も生活に満足できれば良いが、仮に貧困を解消したとしても、
医療や食品など、命に関わる格差が問題になるだろう。
・富裕層は納税からも逃れることができ、豊かでない人々が税などの負担に苦しむ。
→世界的に、富裕層の税負担を大きくし、納税から逃れられないようにすることが重要。
→各国の左派政党が、保守政党も巻き込んで、安定のための策として実現させる。
※実体経済が反映されにくくなっている株など、マネーゲーム的な投資の制限、その莫大な利益に対する課税強化、企業はもちろんだが、堅実に生きる人々の生活、老後を支える投資へ、国家、世界の発展を妨げない程度に、あるいは妨げない方法による転換。
※高額納税に対して、特権には一切つながらないような名誉を与えることは許されるだろう。

◎ 今できることは何か？
～変化の時代、もう遅いのだとしてもあきらめず、絶対にやるべきこと～

① 野党統一候補か、いなければ野党第１党の候補に、まずは力を集めるしかない
～選挙になれば当選可能性が最も高い野党候補へ、戦略的な投票を～

・まずは野党第１党、野党第１党と組む政党の候補を一人でも多く当選させ、
１党優位の状況を変える、政権交代を実現させる。
※ただし維新の会が野党と選挙協力をしない場合、大阪府と、隣接する府県の一部選挙区は例外。
…左派野党の候補よりも維新の会の候補が当選する可能性がずっと大きい場合、維新の会の候補を勝たせるべき。
…左派野党、その支持者には、維新の会よりも自民党の方がましだと考える人もいるし、自民党が議席を減らして維新の会が増やすと、自民党と維新の会が連立を組む可能性が逆に高まるということもありえるが、一番問題なのは自民党１党優位であり、これを変えることが一番難しいから、変えるチャンスがある時は徹底的にやるべき。
→維新の会が自民党を変え、保守勢力が刷新されることがあれば、
長期的にその１強とならない限り、それにはそれで意義がある。

・野党第１党から、あるいは野党統一候補として当選しながら、
自民党に移った議員には絶対に投票しない。それに近い議員にもなるべく投票しない。

② 理想の政党を求めず、全体を見る

～自民ｖｓ維新にはなるべくＮＯを！
自ら考えて選択できるよう、左派野党
(どうしても無理なら別の政党)を育てよう～

・**理想の政党システムを考える。**例えば・・・
自民党的保守、新自由主義的保守、社民系、左派ポピュリズム
…ｉ．この中から２の政党を選んで２大政党制。
ii．２つの政党を選んで２大政党とし、他に＋αをもう１つ
※＋α（第３極）がキャスティングボートを握ることがある。
iii．上の４つのいくつかを融合させてから、ｉ、あるいはiiの形にする。
iv．上の４つを存続させる→（ゆるやかな）２つのグループに分かれる。
少なくとも、優位政党（自民党）に対する挑戦者を決めなければならない。
※選挙制度についての議論もあるが、まずは全体像を考える。

・**理想の政党を求める傾向が強すぎる。**
…Ⅰ．全ての政党には良い面と悪い面がある。
Ⅱ．全ての人を満足させる政党はないし、それを目指せば自らの理念を見失い、
現状へのちぐはぐな対応に終始することになる。
Ⅲ．一時的に大多数の日本人にとっての理想的な政党になっても、
それが維持される可能性は高くない（国内外の変化、内部対立、腐敗）
→だから比較的多くの人々が支持する政党があれば、それとは違う、
その政党の監視役でもあり、その政党では助けとなりにくい人々のための政党が必要。

・**現状、保守は問題があるが強い。**
…保守政党を今よりは明確なものにすることが必要（自民党と維新の会の連携、または合流）。
→現状では弱い左派政党を強くすることが必要（民主党系とれいわの連携、または合流）。
※（）内については自民党と民主党系の弱点が克服されないままになる危険もあるから、
他に良い方法があるか、考えることも必要。
※左派政党は常に、豊かでない人々、弱い人々の味方であるべき政党だから、必要。
現状そうでないなら、何らかの方法でそのような姿に近付けなければいけない。

③ 進歩のない繰り返しを脱する

～繰り返すとしても、らせん階段を上るように～

・**優位政党の分裂に期待するのはやめよう。**
…分裂によって再編が起こることは悪いことではない、むしろ今後必要かもしれない。
しかし、優位政党に甘え、甘くするのはいけない。第２党を育てることが最優先。

・野党内の２分化を理解しよう。
…なぜ２分されるのか。寄せ集めだからというよりも、１党優位に起因することを理解し、
第２極には、対決路線と対案路線の内部対立を克服させる。
…双方の路線を評価し、批判は、思い込み、敵意、軽蔑を排したものに。
第３極には、自民党寄りと民主党系寄りへの分裂、双方への合流を求める。
※可能ならそのような遠心力の克服も可。ただしその場合は姿勢を問うことが重要。

・**ブームをやめて、地道に自民党と民主党系を育てよう。**
…ブームは一時的には良い結果になるように見えても、実際には国民も政党も続かず、
もとにもどった上に、失望だけの思考停止。記憶を失い、また次のブームが起こってしまう。
…与党民主党（左）、野党自民党（右）ともに問題はあったが、民主党系にはまだ与党経験者が、
自民党にはまだ野党経験者がいる。彼らが完全に引退する前に政権交代を実現し、
学習を積み重ねることが重要。

・**野党第１党・自民に対する挑戦者を取りかえるとしても、政界再編をするとしても、次で最後に。**
・挑戦者をコロコロとりかえない：たとえ政権交代が繰り返されても、
自民党政権 → 民主党政権 → 自民党政権 → 維新政権 → 自民党政権
・・・ というように、自民党への挑戦者が代わるのは(一度はしかたがないとしても)、
繰り返されると、非自民の側に与党経験が蓄積されないから問題。結局短期間、
不満を吐き出すためだけの政権交代になってしまう。
→政党の離合集散は、状況が大きく変化し、現状ではどうしても対応できない時に限る。
何かあるたびに「再編が必要」というのではなく、やるとしても、
これで最後にするという覚悟が必要。
…自民党、社会党（現立憲民主党）、その他という構成をどうするか。
自民党側ｖｓ立憲民主党側に、それぞれが成長する形でまとまるなら良い。
５５年体制が全て間違っていたわけではなく、政権交代もなく、社会主義政党の
社会民主主義政党への脱皮もうまくいかず、欧米の基本に届かなかった。
このことと向き合い、学び、欠点を改め、現状に応じた政党・政党システムに。
…それとも保守２大政党など、別の形を目指すのか。
議会制度の先輩の例を参考にできない。これこそ、非常な覚悟と努力が求められる。

・**いざとなれば、副作用の強い２つの劇薬の投与を考える。**
野党がまとまることもできず、かと言って１つの野党が突出することもなく、
１強多弱が続く場合の、野党政治家、国民へのショック療法として・・・
１．自民党が真っ二つに割れるか（これはもちろん国民にはできない）、
消滅させる（副作用：激変による不安定化）。
２．全ての野党を選挙で惨敗させる（自然とそうなることも。副作用：強権政治へ？）。

④ 公明党から「ブレーキ」を、維新の会からアクセルを、国民が取り戻す
～政党間の談合から、政権交代の起こり得る、選挙による路線の選択へ～

・**野党第１党を強くし、政権交代を起こせば、あるいはせめて、**
次の総選挙で起こるはずだと考えられる状況になれば、中小の政党が自民党にぶら下がって
１党優位の傾向を守る状況は変わる、自民党に移ろうとする議員が続出する状況も変わる。
→やがて、国民が自民党の政策パッケージと、民主党系の政策パッケージのどちらにするか、
本当に選択できる選挙になる（民主党系の政策実現能力が向上する）。本当のアクセル、
本当のブレーキは政権交代、 少なくともその一歩手前となるような選挙結果、
または政権交代の可能性を背景とした世論。

⑤ 左派政党の、特に国防政策を現実的にする
～リベラルだ、保守だという、左派隠しの不要な左派に～

・**左派政党に国民の多くの声を届け、**
平和主義の理想を強く持つ左派の立場で、国防を現実的に考える政党にする。
※現実的になっても、支持が減らないと、左派政党に実感させなければならない。
…政治家ではない国民の間の、相手に敬意を持つ議論も重要。

◎ 結び
～難しく、遅すぎるように見えても、日本人ならできる１３１年目の前進～

ＩＴ、グローバリズムによる変化、競争激化、そして少子高齢化、環境問題、中国等の脅威、途上国はどう変わるのか。日本の主権者である国民が決断する政治へ。外圧とは違う国難の今、自分たちの力で変わることができたなら。苦しみは伴っても、それは、言いなりになる、受け身の苦しみではない。その先には本当の成長、豊かさが必ずある。

◎ 製作者紹介

伊吹 健（いぶき けん）　　ＨＰ：政権交代.com

小６で土井ブーム、高１で新党ブーム、政権交代を経験しました。母の祖国ドイツに行くと、いつも日本の自慢をしていましたが、どうしても誇れないことがありました。それは政権交代、特に選挙における国民の判断で政権交代が実現したことがほとんどないということです。
高校生の時、知識が乏しい中で、自民党の離党者が中心となった非自民連立政権の誕生を見て、日本ではそのような政権交代しかできないのか、と失望。以来ずっと真の政権交代、政権交代の定着に期待して、政治の動きを追い、政治史、他国の政治等を学んできました。私はいわゆる「日本の左派」ではありません。軍備は充実させる必要があると考えています。憲法改正に賛成です。２０１０年の自民党の改憲案は論外だと思いますが、自民党を敵視していません。維新の会の改革を評価しています。しかし、それぞれ負の面もあることから、保守２大政党制には否定的です。政党システム全体を見る事が重要だと考えます。対米追従は問題だと思いますが、最大の脅威は中国、北朝鮮だと考えています。それでも、社会民主主義の大政党は必要だと考えています。
※ドイツは他の欧米諸国と比べれば、選挙による政権交代はかなり少ないです。